

この本の「解説」より抜粋

(略)・・・たとえばこのエッセイ集の「その男たち、共謀につき」の章を読んでもらえる・・・まさか、あれほど親しかった身内たちからこんなことをされることもあるのかと、家庭円満、家内安全、肉親正直な人たちなら驚かれるような経験もしたようですし・・・しかもその身内たちというのは、とてもきれいな貼り絵で商売をしていて、神奈川県あたりでは有名な家族のようで、こんなにきれいな貼り絵を仕事にしている方たちが、こんなにも欲深くて恥知らずなことをしていたという〈事実〉も書いてあるそうです。そのことで、著者の奥さんは非常に苦しんだしくて・・・(略)・・・著者の〈生い立ち〉については、「名もなく貧しく美しくなく」の章を読んでみてください。本邦初公開です。といっても、公開されるのを誰も期待していなかったかもしれないが、多少とも著者のことを知っている人たちにとっては、ちよつと驚くかもしれないことが書いてあります。それも〈事実〉です。少し〈重い〉かもしれませぬ。

そう感じたら、「エコバック一杯の幸せ」を読んでみてください。かなり〈軽い〉です。お笑い系放送作家らしい書き方です。四十年ぶりにUターンした故郷暮らしの楽しさが満載です。「私ね、思うんですよ。人生には失樂園が必要だっつね」・・・失樂園はいけません。こんなこと書いていると西田さんに怒られます。番組の構成を担当している、原すすむに嫌われます。樂園でした。

柳家喜多八、林家正蔵、柳家喬太郎、桃月庵白酒、柳家三三、春風亭一之輔・・・落語ファンにはたまらない名前も出てきます。著者は故郷で落語会を主催していますが、そこに出演していただいた師匠方の、主催者にしか書けないエピソードも披露してあります。

学校の先生や、子供たちの教育にたずさわっている関係者には「素晴らしき哉、人生に落語」をおすすめします。そういう方々に興味をもって読んでもらえるような、子供たちに落語を教えている著者ならではの経験も書いてあります。人気・実力・人柄と三拍子揃った師匠方と落語会を主催し、故郷の人々に落語の素晴らしさを伝えている著者は、その経験から確信したようです。人生には樂園も落語も必要だし、子供たちにもいまこそ落語が必要だと。

著者と同じ年で、十九歳の時に知り合って六十二歳の今日まで、一番身近でみてきた奥さんは、「この本にはあなたの喜怒哀楽が詰まってるね」といったそうです。私もそう思います。確かにこの本には、著者の〈喜・怒・哀・楽〉が詰まっています。著者は小学校に入学したときから六年生まで、通信簿の父兄通信欄に先生たちから「喜んだり悲しんだり怒ったりの激しいお子さんですね」みたいなことを毎年書かれていたそうです。筋金入りの喜怒哀楽男です・・・(略)